

# 音楽を通した高大連携プログラムの開発と実践

## －協働の視点を探る－

ふるかわ ゆうすけ  
古川 裕介

**抄録：**急激に変化する時代の中、多様な人々と協働していくことのできる力が求められている。本研究では、高校生と大学生が協働して演奏会を創り上げる実践を通して、双方にどのような学びがあり、どのような意識の変容があったのかを検証する。大学と協働するための視点を探った2年間の実践報告と、実践を通してみえてきた高校と大学が連携する意義について記述する。

**キーワード：**音楽、演奏、連携、協働、表現

### 1. はじめに

#### 1-1 研究動機

筆者は大阪教育大学教養学科芸術専攻音楽コース（声楽）を7年前に卒業し、大阪府立高校芸術科（音楽）教諭となった。在学当時、音楽コースの授業は個人の専門性を磨くことには力を入れてきたが、連携・協働することに関しては極めて希薄であると課題意識を持っていた。後に、大阪教育大学では改組が行われ、2017年4月に教養学科が教育協働学科となった。教育協働学科は、総合的な教養に加え、教育マインドと専門性の高い能力を身につけ、学校を取り巻く地域や社会を含む「チーム学校」の中心メンバーとなる人材を育成。教育的な視点から学校・家庭・地域・社会と連携協働し、多様な教育課題の解決を図れるような人材の育成をめざす学科であり、授業の枠組みが大きく変更された。特に音楽分野では、音楽コースという名称が音楽表現コースに変更され、3年生では、「社会芸術教育協働活動・音楽」というアウトリーチ型授業が新設された。「協働」「表現」が重視されていることが見て取れる。令和3年1月26日中央教育審議会答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』において、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要」と述べられている。

また、高校においても学習指導要領が改訂され、2022年度から新カリキュラムが始まった。音楽Iの学習指導要領目標を以下に示す。

音楽の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽**表現**をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 自己のイメージをもって音楽**表現**を創意工夫することや、音楽を評価しながらよさや美しさを自ら味わって聴くことができるようにする。
- (3) 主体的・協働的に音楽の幅広い活動に取り組み、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、音楽文化に親しみ、音楽によって生活や社会を明るく豊かなものにしていく態度を養う。

音楽I目標においても「協働」「表現」という言葉が用いられている。「社会に開かれた教育課程」を実現していくために、高大が連携・協働して取り組むことで、日頃の授業だけでは身につけることのできない協働する力を育成していくことができないかと考えた。そこで、本研究では、音楽を通した高大連携プログラムの開発・実践を行い、高校生と大学生双方にどのような学びがあり、どのような意識の変容があったのかを検証することで、協働する意義を明らかにし、音楽を通した連携のモデルケースとして持続可能な形で継承・発展していくことをめざしたい。

## 1-2 研究方法

以下の高大の授業を中心に、取り組みをすすめた。

○大学開講授業 社会芸術教育協働活動・音楽（3 回生開講・2 単位）

○附属高等学校天王寺校舎 芸術科（音楽）授業

音楽Ⅰ（高校 1 年生開講・2 単位） 音楽Ⅱ（高校 2 年生開講・1 単位）

高大授業における合同演奏会の企画・実施を取り組みの大きな柱とし、2021 年度は音楽Ⅰ授業と、2022 年度は音楽Ⅰ・音楽Ⅱ授業と協働する形をとった。2022 年度は合同演奏会終了後に、高校生・大学生・保護者を対象としたアンケートを実施。成果と課題を明らかにし、次年度の取り組みへとつなげる。また、合同演奏会以外にも大学教授による特別授業等を新たに企画することで、大学との連携の視点を探った。

授業コード	913001	ナンバリング	C9377C01	キャンパス	柏原キャンパス（学部）
授業科目区分	(柏) 教育協働 芸術表現 プロジェクト演習科目				
授業科目名	社会芸術教育協働活動・音楽			単位数	2
担当教員	山畑 誠、中務 晴之、福垣 琢 尾、玉井 裕子、北川 文雄、神代 修、岡本 麻子		担当教員の職務経歴 職名		
曜日時限	集中講義		開講期	2021年度 前期	
キーワード	音楽、アウトリーチ活動		授業形態	演習・実技	
到達目標（共通）	豊かな教養と広い視野		以下、*印が付いた項目が到達目標です。		
到達目標（教員養成）	学校教育の基礎的理解	指導内容の理解と実践力	子どもへの対応の理解		
	芸術実践力	教職力量を自らひらく力			
到達目標（教育協働）	教育理解	協働力	*	専門的知識・技能	
	教育協働実践力	*			
学習指導要領（幼稚園 教育要領を含む）との 対応					
授業の到達目標	社会芸術教育協働活動（音楽）に関する理解を深めるとともに、社会芸術教育協働活動（音楽）に関する課題を自らみつけ、説明することができる。これまでに習得した専門ならびに教育協働に関する知識と技能に基づき、社会芸術教育協働活動（音楽）に関する課題を他者と連携・協働して解決することができる協働力を身につける。				
授業の概要	この授業では、学校・保育園・介護施設などでアウトリーチ活動（音楽活動）を行う。準備やまとめの段階で社会芸術教育協働活動（音楽）に関する専門的な内容を解説し、社会芸術教育協働活動（音楽）に関する問題を演習テーマとして設定できるように指導する。それぞれの課題について討論させながら課題解決型学習形式で指導する。				
授業の計画 （各回における準備学 習・授業形態等を含 む）	第1回 オリエンテーション、グループ分け 第2回 グループごとに演奏会の企画のためのリサーチ、資料集め 第3回 グループごとに演奏会の企画案作成 第4回 演奏会場との交渉、日程調整 第5回 交渉後の企画案の再検討 第6回～第13回 演奏会の準備、練習 第14回 演奏会 第15回 まとめ				
履修にあたっての 注意事項	演奏活動に関しては新型コロナウイルスの感染状況により変更がある可能性があります。 学外の演奏活動ではなく、学内での模擬演奏会でも可能とします。 模擬演奏会は録画して担当教員に提出すること。				

図 1 『社会芸術教育協働活動・音楽』 2021 年度 シラバス

## 2. 第一回 附属高等学校天王寺校舎と大阪教育大学との合同演奏会

演奏会日程：2021 年 10 月 21 日（木） 東大阪市文化創造館小ホール

### 2-1 対象学年と場所の設定

高校 1 年生 『音楽Ⅰ』（82 名）

大学授業 社会芸術教育協働活動・音楽 より

2 チーム 『Melodious』（ピアノチーム 12 名） 『OKUtet』（金管チーム 8 名）

初めての取り組みであるため、今回は音楽Ⅰ受講生のみを対象とし、授業での成果を高校生と大学生がお互いに披露しあうことのできる場として、本格的なクラシックホールの一つである東大阪市文化創造館小ホールを高大合同でお借りし、実施することとなった。

## 2-2 キックオフミーティングの開催

- 日程：2021年8月26日（木）13:30～14:30 オンライン  
 参加：本校音楽科教員2名・大学担当教授・高校生実行委員5名・大学生チーム代表2名  
 内容：
  - ・企画の趣旨説明
  - ・大学生各チームの紹介
  - ・高校生運営委員の自己紹介
  - ・大学授業担当 山畑 誠 准教授からメッセージ
  - ・質疑応答

本来は対面で実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため、オンラインでキックオフミーティングを開催した。本ミーティングの目的は、演奏会を教員主導ではなく高校生と大学生が協働してつくり上げていくという意識をもつこと、そして演奏会を創り上げるために具体的に何をしていけば良いのか共通認識をもつことであった。この目的はおおむね達成することができ、これを機に具体的な準備作業を分担して行っていくことができた。のちに大学生からプログラムの最後に高校生と大学生と一緒に演奏できればと提案があり、「365日の紙飛行機」を高大ピアノ連弾による伴奏で生徒たちが客席で歌うという企画が実現した。



図2 山畑誠准教授より大学の状況・教育協働学科の理念の説明の様子



図3 大学生チーム代表と運営委員生徒との交流の様子

## 2-3 本番当日

新型コロナウイルス感染症対策のため、会場収容定員（300名）の半分の人数での実施という制限がかかり、出演者と高大教員のみ参加の演奏会となった。（そのため保護者には後日動画を配信する形で見ていただけるようにした。）演奏会では、音楽Ⅰの2クラスと、土曜日に希望者対象に開講している「スーパーサタデー」の受講生15名がそれぞれ合唱を披露した。大学生は管楽器アンサンブルと二台ピアノ演奏という形態で、本格的かつハイレベルな演奏を見せてくれた。また、高校生運営委員を中心に、集合点呼やリハーサルの段取り・アナウンス等すべて自分たちで行うことで、演奏会を開催するにあたっての一連の業務を経験させることができた。2019年に新しくできた東大阪市文化創造館は音響設備がよく、芸術を味わうにはこれ以上ないくらい素晴らしい響きの環境であり、高いレベルの音楽体験ができたと確信している。こちらが想定していた以上に生徒たちの満足度は高く、成功と言えるのではないかと思う。その成果と課題を整理し、次年度の企画へつなげていくこととした。

### 【演奏会プログラム】

#### 1st stage アンサンブルの愉しみ

- ・「スーパーサタデー」受講生による演奏
  - 「鳥の歌 Le chant des oyseaux」 C.ジャズカン 作曲
- ・大学生チーム「OKUtet」による演奏
  - 「ティーチテイル」
  - 「晴れた日は恋人と市場へ」

#### 2nd stage 高1音楽選択生による合唱演奏（授業発表）

- 高1リンゴクラス
  - 「光が」 工藤直子 作詞 松下耕 作曲
  - 混声合唱曲集『光と風をつれて』より
  - 「はじまり」 工藤直子 作詞 木下牧子 作曲
  - 「民衆の歌」 岩谷時子訳詞 C.シェーンベルク 作曲

#### 高1レモンクラス

- 「流浪の民」 石倉小三郎訳詞 R.シューマン 作曲
- 「僕が僕を見ている」 川村元気 作詞 岩崎大整 作曲 横山潤子 編曲
- 「We Will Rock You」 B.メイ 作詞作曲 M.プライマー 編曲
- 「Jupiter」 吉元由美 作詞 G.ホルスト 作曲 松下耕 編曲

#### 3rd stage 大学生チーム「Melodious」2台ピアノによる演奏

- ジブリメドレー
  - 千と千尋の神隠し より 「いつも何度でも」「あの夏へ」
  - ハウルの動く城 より 「人生のメリーゴーランド」「世界の約束」
- シークレットクラシック
  - 1. チャイコフスキー 「くるみ割り人形」より
  - 「行進曲」「金平糖の精の踊り」
  - 2. ラヴェル 「マ・メール・ロワ」より
  - 「眠れる森の美女のバヴァース」
  - 3. プラームス 「ハンガリー舞曲第5番」
  - 4. ガーシュウィン 「ラブソフィー・イン・ブルー」

クロージング（高大合同）「365日の紙飛行機」

図4 演奏会プログラム



### 3. 第二回 附属高等学校天王寺校舎と大阪教育大学との合同演奏会

演奏会日程：2022 年 12 月 22 日（木） 本校体育館メインアリーナ

#### 3-1 目的の設定

昨年度の経験を踏まえ、今年度のコンサート実施の目的は以下のように設定し、高校生・大学生・教職員に事前に周知し、カリキュラムの一環で実施した。

- ① コロナ禍で「生」演奏を聴く機会が減っている今日において、音楽を専門的に学ぶ大学生と交流・協働することを通して、演奏楽器の特色やその表現方法を実践的に学ぶ。
- ② 日頃音楽の授業で学習している楽曲をお客様の前で披露するための一連の練習プロセス・取り組みを通して、自己表現力を高めるとともに、「企画力」「協働力」を身につける。

高校 1 年生 『音楽Ⅰ』（74 名）

高校 2 年生 『音楽Ⅱ』（82 名）

本校音楽科では数十年にわたり（筆者が現存する資料で確認できるだけでも 22 年前から継続している）、1 学期末と 3 学期末に授業で学んだ成果を発表する音選発表会を本校小講堂で実施している。その伝統を受け継ぐとともに、音楽を学ぶ大学生とコラボレーションすることで、より芸術的感性を磨くことにつながるのではないかと考えた。2022 年 5 月 25 日に大学授業『社会芸術教育協働活動・音楽』を担当している山畑誠准教授から、本校で 2 グループの受け入れを正式にお願いしたいと依頼があった。ラターのグローリアを高校生と一緒に演奏するグループ（以下、ラターグループ）、もう一つは大人数グループである。ラターについては、2021 年 12 月に筆者の方からこの曲を大学と一緒にやりませんかとトランペット担当教授と話をしてきたこともあり、その計画で年度当初より音楽Ⅱのシラバスに組み込み授業を進めていた。大人数グループをどのように位置づけるのか悩ましかったが、学生と相談しながら進めていくこととした。次に今回の協働の過程を順に追って紹介する。（表 1）

#### 3-2 ラターグループを中心とした大学生との協働の過程

表 1 協働の過程

		場 所	内 容	参 加
①	5 月 30 日（月） 18:15～18:45	オンライン	大学生グループ代表との打ち合わせ	大学生チーム代表 2 名
②	7 月 14 日（木） 8:40～10:30	本校小講堂	音楽Ⅰ（1 年）・音楽Ⅱ（2 年） 授業見学	大学生チーム代表 2 名
③	9 月 27 日（火） 16:30～18:00	大阪教育大学柏原キャンパス K101 教室	オルガンと金管アンサンブルとの合わせ	本校 2 年オルガン担当生徒 大学特別金管アンサンブル
④	9 月 29 日（木） 14:20～16:10	本校小講堂	第一回合奏	音楽Ⅱ（2 年）受講生徒 大学特別金管アンサンブル
⑤	10 月 20 日（木） 10:40～12:30	本校体育館	第二回合奏	音楽Ⅱ（2 年）受講生徒 大学特別金管アンサンブル
⑥	12 月 21 日（水） 10:40～12:00	本校体育館	第三回合奏	全員
⑦	12 月 22 日（木） 9:40～16:10	本校体育館	本番	全員

##### ① 大学生グループ代表との打ち合わせ（5 月 30 日）

顔合わせも兼ねて、方向性を確認した。3 部構成の発表会とし、第一部は音楽Ⅰ授業発表、第二部は大人数グループを中心としたステージ、第三部は音楽Ⅱ授業とラターグループがコラボレーションしたステージという枠組みで取り組んでいくこととした。演奏場所については、大学の協力がどこまで得られるのか分からないが、ホール等で実施できないかを模索し、難しければ本校体育館で実施するという方向で進めていくことで話をまとめた。協働していく上で、本校生徒の実態を知る必要があるのではと助言したところ、大学生グループ代表から一度授業を見学したいと申し出があり、②の機会が実現した。

② 音楽Ⅰ・音楽Ⅱ授業見学（7月14日）

音楽Ⅰ・音楽Ⅱの授業を大学生グループ代表2名が見学した。折角なので授業内で自己紹介をしていただき、本校生徒と大学生とで交流する時間をとった。大学生は、授業見学を通して本校生徒の音楽レベルの高さに驚くとともに、自分たちが演奏会で披露する曲目や学校現場と協働することについて考えるための絶好の機会となった。

③ オルガンと金管アンサンブルとの合わせ（9月27日）

オルガンを担当する本校2年生2名と指揮者である筆者が柏原キャンパスに出向き、初めて大学生と合奏した。オルガンを担当した生徒は、普段演奏しているピアノの減衰する音に比べて持続するオルガンの性質に驚きながらも、すぐに順応し大学生に引けをとらない演奏を披露した。

④ 第一回合奏（9月29日）

音楽Ⅱ授業において、大学特別金管アンサンブルと一緒に練習をする初めての機会となった。小講堂がコンサートホールのように響き渡り、金管楽器と打楽器の迫力に驚くと同時に、この音圧に負けないように歌うためにはどのようにしたら良いのか考えるきっかけとなった。以下第一回合奏を終えた当時の生徒数名の感想を示す。加えて、テキストマイニングで解析したワードクラウドでの分析図も踏まえると、「金管」「かき消す」という単語が多く出現し、そのことに付随して金管楽器の迫力をそれぞれの視点から感じたことを表現する単語が出現していることから、生徒たちが今まで経験したことのない音楽体験であったことが見て取れると同時に、自らの音楽的な課題についても生徒たち自身で考えることができた。

- ・声量が足りないということを痛感しました。声量が足りない、というよりは、響いていない感じかもしれません。楽器の迫力で歌がかき消される不安から、無理に大きい声を出そうとしてしまいました。また、周りも重心が上がって頑張っただそうとしている人が多くいたように感じました。
- ・みんな慣れてなくて不安なものもあるが、声小さくて金管に負けている。また、強弱が全然ついてないとか音の長さが違うとか、同じようなメロディーだけど音は違うようなところで別のところの音程を歌っているとか、直すべきところが沢山あった。楽譜が読めない人は伴奏がどこを吹いているのか分からなくて音の入りを見失うのが多かったので、指揮をよく見ることが大事だと思った。
- ・金管楽器を混じえるとやはりグローリア全体が活気に満ち溢れて、歌っていて楽しくなるような反面、自分の声が通りにくくなることを感じました。音程を合わせながら声を張るとというのが課題なのだろうと思いました。
- ・私は吹奏楽部でトロンボーンを吹いているので、金管楽器（特にフロントベルの楽器）の音量の大きさはよくわかっていたが、80人の歌を持ってしてもアンサンブルの方が音量が大きいと言うことは考えもしなかった。
- ・実際に生演奏と合わせてみると、大きな一体感となっているように感じました。金管楽器や打楽器の強弱の付け方やスピード感、音の振動を身近で肌で感じることで、歌い手にもそれが伝わって、今までよりますますメリハリのある迫力のある合唱に仕上がってきていると感じました！
- ・身体の芯まで楽器の音が届いたような気がしてとても衝撃的だった。1楽章、2楽章はよくのびのびと歌えたが、まだ練習不足な3楽章ではなかなか上手く合わせられず、難しかった。

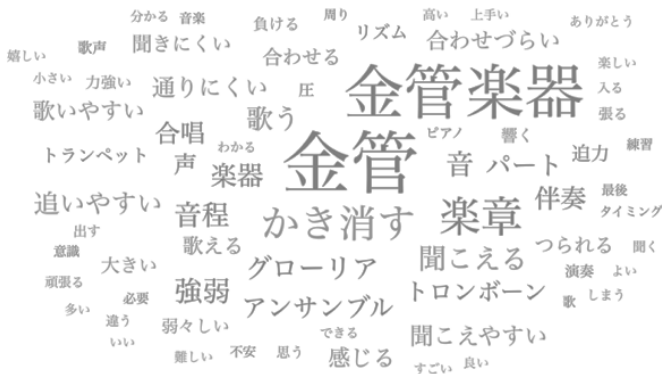


図5 ワードクラウドによる分析図



図6 第1回合奏の様子

⑤ 第二回合奏（10月20日）

本番演奏する本校体育館メインアリーナで初めて合奏を行う。

⑥ 第三回合奏（12月21日）

本番前日リハーサルとして、大学生ステージ第二部とラターステージ第三部のリハーサルを行う。

⑦ 本番（12月22日） 本番については後述する。

3-3 大人数グループとの協働

大人数グループでは、演奏会に参加する高校生とその保護者を対象に、音楽を学ぶ大学生による本格的な演奏を体験できる魅力あるプログラムをめざして準備をすすめてきた。当初はピアノ科の学生6名も参加予定であったが、大学内での連携不足等もあり、ピアノ学生の演奏は別の機会を設け、金管楽器と打楽器の演奏を中心に第二部を構成することで対応した。また、大学生から第二部の最後に高校吹奏楽部員と一緒に演奏する機会を設けようと発案があり、大学生5人・高校生吹奏楽部3人による金管アンサンブル「ていーち・ていーる」の演奏が実現した。

3-4 合同演奏会本番について

合同演奏会では、準備・片付けや保護者受付等も生徒自身で行った。高校生と大学生が完全分業制になってしまい、協働して準備・片付けを行うことができなかったのが悔やまれるが、おおむねタイムスケジュール通りに進めることができた。本来なら音響設備のよいホールで実施したかったが、様々な課題があり場所は本校体育館メインアリーナでの実施となった。しかしながら一人ひとりが懸命に音楽に取り組む姿が見られ、体育館とは思えない素晴らしい響きと音色で包まれた。

### 演奏会プログラム

**第一部 高I音楽選択生による合唱ステージ**  
 高Iレモンクラス  
 B.メイ / 『We Will Rock You』 米津玄師 / 『Lemon』  
 千原英喜 / 『ある真夜中に』  
 高Iリンゴクラス  
 滝廉太郎 / 『花』 スメタナ / 『モルダウ』  
 ハイスchool・ミュージカルより 『We're all in this together』  
 高I音楽選択生全員 クリスマス・キャロル『ひいらぎかざろう』

～休憩～

**第二部 大阪教育大学教育協働学科音楽表現コース学生**  
 (3回生開講授業『社会芸術教育協働活動・音楽』受講生)によるステージ

- ・打楽器四重奏  
 4/4 for Four/Anthony J. Cirone
- ・ホルン独奏  
 モーツァルト:ホルン協奏曲I番より I楽章
- ・金管五重奏  
 エワルド:金管五重奏曲第一番 1.3 楽章
- ・大教生・高校生合同フレキシブル  
 福島弘和:ていーち・ていーる

～休憩～

**第三部 高II音楽選択生と大学生による合同ステージ**

- ・ジョン・ラター作曲 『グローリア』
  - 1 アレグロ・ヴィヴァーチェ
  - 2 アンダンテ
  - 3 ヴィヴァーチェ・エ・リトミコ
- ・財津和夫作詞・作曲 『切手のないおくりもの』

図7 演奏会プログラム



図8 演奏会の様子 第二部「ていーち・ていーる」



図9 演奏会の様子 第三部ラター『グローリア』



### 3-5 生徒・大学生・保護者の反応（アンケートより）

出演生徒に対するアンケート（回答 111 名 内訳：高 1 生徒 59 名 高 2 生徒 52 名）

出演大学生に対するアンケート（回答 14 名）

出演生徒の保護者に対するアンケート（回答 28 名 内訳：高 1 保護者 13 名 高 2 保護者 15 名）

#### 3-5-1 発表会全体の満足度について

【問 1】発表会全体の満足度について  
111 件の回答

【問 1】発表会全体の満足度について  
14 件の回答

【問 1】発表会全体の満足度について  
28 件の回答

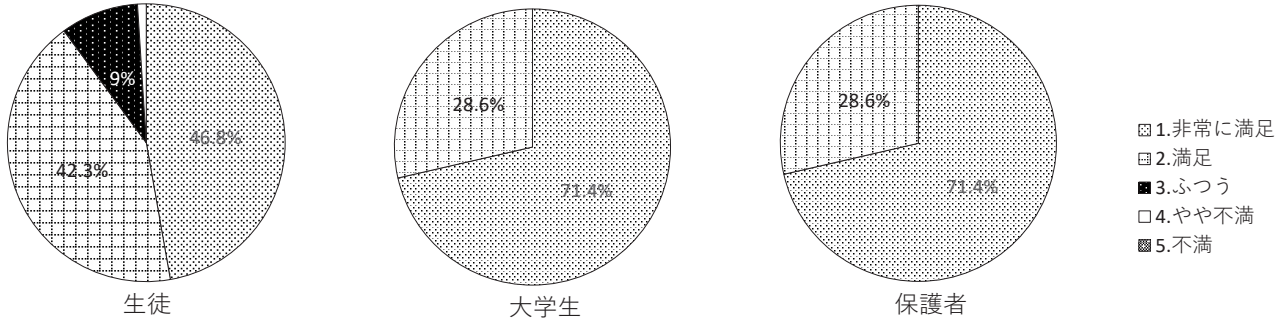


図 10 アンケート結果

演奏会全体の満足度についての設問に対し、約 89% の生徒が肯定的評価（非常に満足・満足）を示し、大学生・保護者に関しては、回答者全員が肯定的評価であった。生徒・大学生・保護者全てにおいて満足度の高い演奏会になったことが見てとれる。満足度に対する理由を記述してもらったが、その一部を掲載するとともに、ワードクラウド（出現頻度順）も合わせて示す。

#### 【高校生】満足度評価に対する理由・演奏会の感想

- ・普段聴かない先輩方の音楽を聴ける非常に良い機会になったから。また、大学生とも共演（協演）し、合唱と吹奏楽のコラボもあり、聴いていて凄く楽しかったから。
- ・自分達の発表の完成度についてはまあまあですが、他の発表を聴いてとても楽しかったなと感じたから。
- ・先輩の合唱はすごく刺激になった。来年、あれくらい長い曲を大学生と一緒にできるのが楽しみだ。また、大学生の特別演奏も普段は見もしないような事で、新鮮だった。
- ・全体を通して質が高く充実した内容だったから。
- ・楽しく歌うことができた。練習より上手かった。他の発表もどれも上手くて、聞いていて幸せになれた。
- ・今まで練習してきた成果を出して歌いきれたし、他の団体の演奏を聞くことで新しく学ぶことがあったから。他学年で発表しあうことはなかなかないので、いい刺激になったと思うから。
- ・私は合唱を聞くのが好きなのですごくワクワクしました。金管アンサンブルも聞く機会が少ないので楽しかった。
- ・演奏だけでなく、鑑賞も、そして運営も含めて楽しんで全力で取り組むことができた。ただ、もっとクオリティを追究できたと思うので、そこが少し心残り。
- ・知っている曲やその歌詞なら聞き取れたが、知らないところは何を言っているかわからなかった。また打楽器や金管楽器の演奏はその良さや楽しさに疎い自分には理解できなかったから。聴いていて盛り上がる曲にはある程度反応できた。音楽選択の他の人は演奏の音楽的な知識を持っていたり感情移入できたりしたのだろうか。もちろんその合唱、合奏が素晴らしいものであることは言うまでもないが、なんとなく蚊帳の外にいる様だった。我々の合唱に関しては、いつも通りで本番になったからといって印象に残るような違いは感じなかった。ただ、後ろの列だったというのものもあるけれど観客が終始動かないのでどう思われているのかわからなかった。
- ・眠気が勝ってしまった箇所があった。
- ・高 2 生の演奏を楽しみにしていたが、楽器で大事なところが負けていた。
- ・楽しかったけど寒かった。

ワードクラウドによる分析図では、「できる」を中核に、「楽しい」「聞ける」「良い」等ポジティブな言葉が多く出現している。今回の演奏会を通して「できる」という感覚が生徒の中に生まれ、その結果「楽しい」という気持ちにつながっていると考えられる。自由記述からも、自分たちのことだけでなく、他者に目を向けたものが多く見られ、協働の観点から非常に評価できる点である。また、「蚊帳の外にいたようだった」「眠気が勝ってしまった」等の意見もあった。今回時間的な制約も大きく、授業でゆっくりと楽曲に向き合う時間が取れなかったのが反省点としてあげられる。演奏会に向けた練習過程の中で、より生徒たちが音楽に主体的に参画するための工夫が求められる。

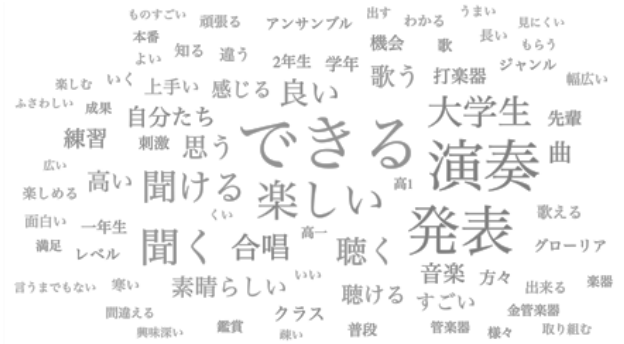


図 11 ワードクラウドによる分析図

【大学生】満足度評価に対する理由・演奏会の感想

- ・クラスごとの演奏では、それぞれのクラス、指導者の色が表れていてとても面白かった。また一人一人が積極的に歌っていてとても良かったと感じた。
- ・ラターは、難しい曲で歌うことはとても大変だったと思うが、本番は最後まで通せて凄いなと感動したため。学校の雰囲気の良い、高校生達のパワーを感じ、大きな刺激をもらえました。
- ・生徒たちが楽しんでいる様子が見られたため。
- ・高校生・大学生の各ステージや合同での演奏など、非常に盛りだくさんのプログラムで、演奏している側も聴いている側も楽しめた演奏会だったと思うからです。
- ・生徒の皆さんにも大学生の演奏を聴いてもらう有難い機会になり、また大学生と高校生と一緒に演奏するという貴重な経験をさせていただいたため大変有意義な時間となりました。
- ・古川先生を始めとする、実際の教育現場における教師の指導している姿を生で見ることができたのは、演奏以外の面でもとても収穫になりました。
- ・高校生の奏でる音楽も、とても素晴らしかったです。高校生の青春を分け与えてもらいました。
- ・各演奏のクオリティが高く、高校生と大学生どちらにとっても良い刺激をもらえる演奏会だったと思ったから。
- ・高校生と共に演奏する機会はほとんどないため、貴重な経験になりました。実際に高校生が授業で取り組んできた曲の演奏を聴くことができたこともよかったです。
- ・合唱と金管という珍しい編成での音楽を演奏することができたことは、とても良い経験となったからです。また、各部において、高校生と大学生それぞれの良さが発揮でき、またそれが合体した時の良さも表現することができたのではないかと思います。
- ・事前の準備から本番、片付けまで非常にスムーズであったから。

ワードクラウドによる分析図では、高校生と同様に大学生においても、「できる」という単語が多く出現している。自由記述においては、高校生のレベルの高い意欲的な演奏に驚き、刺激を受けたという意見が多く見受けられた。また、教育現場において教師の指導している姿を生で見ることができたことが勉強になったと記述している学生もあり、演奏以外でも学びがあったことが見て取れ、そのことが筆者としては何よりも収穫であると感じている。

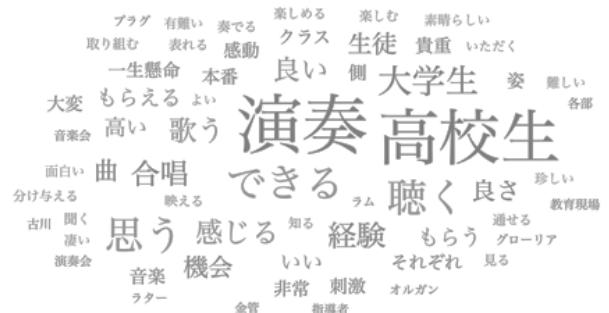


図 12 ワードクラウドによる分析図



【保護者】満足度評価に対する理由・演奏会の感想

- ・音楽の授業とは思えない素晴らしい出来映え。中学校の音楽会からずっと驚かされるばかりです。先生の熱意と生徒の合唱の破壊力がすごい。感動しました。体育館が寒いのも忘れませんでした。
- ・様々な音楽と演奏、バリエーションが豊かで楽しめた。
- ・迫力があり発表は良かったが、体育館が寒すぎた。
- ・どの曲も、生徒・先生・携わる皆さんが練習を重ねたであろう質の高い演奏でした。バラエティに富んだプログラムでとても楽しい演奏会でした。
- ・先生達の丁寧かつプロフェッショナルな指導があってこそ生徒達は身につけられた芸術教養を最大限この場で無言で伝えて来られたと感じたからです。思わず感激しました。
- ・高校生、大学生、保護者と Win Win Win の状態で、とても良い機会だと思いました。音楽を勉強する上で本番は何回あっても良いと考えるからです。楽器奏者と同じ舞台に乗れる幸せ、とても貴重な事だと気付くのはもっと大人になってからかもしれませんが、きっと心に刻まれる出来事になると思いました。
- ・高校生の合唱も大学生の演奏もとっても上手で聞き惚れました。
- ・高校生にもなると、学校の様子を話さなくなり、ましてや、授業のことなど一切触れないので、少しでも学校での我が子の様子が垣間見れるこのような機会には非常に感謝しています。
- ・色んな曲に触れる機会と、今後もこのような発表会に保護者も参観できる機会を持ち続けて頂けると有り難いです。ありがとうございました。
- ・子供の行事活動が長期に渡り見学させて頂く機会がなかったので、とても貴重な時間でした。生徒達の完成度も期待していた以上に上手で、この見られなかった3年間分の成長を感じました。また、大学生の方々の素晴らしい演奏のおかげもあり、迫力のある音楽会でしたので感動的でした。もう少し近くで見られたら更に良かったです。
- ・中学生時より参観等がないままきておりましたので、子供の発表の場を見せて頂けたことに感謝致します。

ワードクラウドによる分析図では、演奏や合唱というワードが中核にあり、「良い」「素晴らしい」というポジティブな形容詞が多く出現し、先生・生徒・大学生という出演者の名前が同じ頻度で多く出現している。出演者が協働してこの演奏会を作り上げてきたことを感じていただけたのではないかと。また、コロナ禍で保護者が生徒の様子を見る機会がほとんどなかったため、学校行事に参加できたことが何よりもよかったという意見が多く寄せられた。音楽を通して家庭でのコミュニケーションのきっかけとなっている様子が伺え、このことも今回の成果であると考えられる。

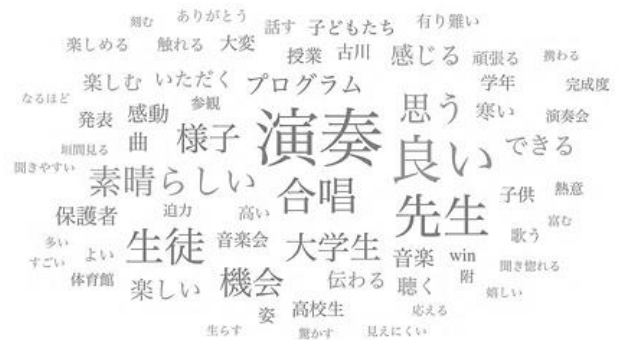
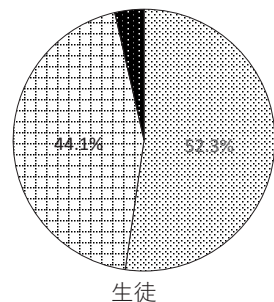


図 13 ワードクラウドによる分析図

3-5-2 第二部（大学生によるステージ）に対する設問

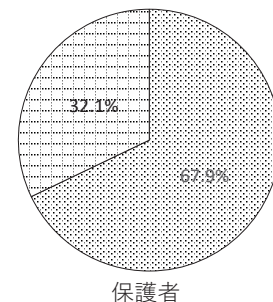
『第二部は鑑賞する意義のあるプログラムでしたか』

【問7】第二部は、皆さんが鑑賞する意義のあるプログラムでしたでしょうか？  
111 件の回答



生徒

【問7】第二部は、附属天王寺の高校生が鑑賞する意義のあるプログラムでしたでしょうか？  
28 件の回答



保護者

図 14 アンケート結果

生徒回答者の約96%が肯定的意見（大変意義がある・おおむね意義がある）であり、保護者の回答者全員が肯定的評価であった。高校生からは「普段大学生の演奏を聞く機会なんてほとんどないので聞けてよかった。打楽器四重奏やホルン独奏、金管五重奏など様々なアンサンブルがあってとても楽しめた。」等本格的なクラシック演奏を聴くことのできる貴重な機会となったことが読み取れる記述が多く、保護者からは「大学生の方との活動体験が高校生にとっては将来の選択肢の参考になることもあるのではないのでしょうか。」等の意見も寄せられた。

### 3-5-3 今後の取り組みに対する設問

最後に出演生徒に対し以下の質問をし、今回の演奏会を開催する意義があったのかを確認した。

『昨年に引き継ぎ第2回の高大同での演奏会となりました。今後もこのような機会を設けることに意義があると思いますか？』

回答生徒の約95%が肯定的評価（大変意義がある・おおむね意義がある）であった。自由記述欄の内容を一部紹介する。今回の企画の目的を理解していることが読み取れる協働の要素にあふれた記述ばかりである。是非お読みいただきたい。

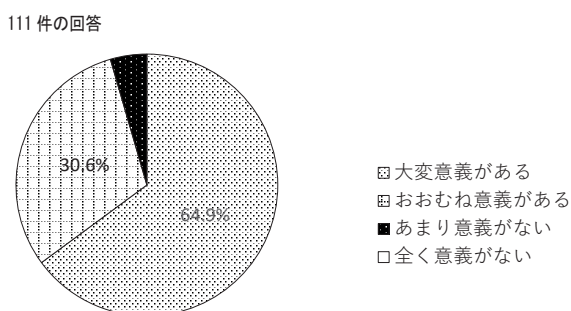


図15 アンケート結果

- ・せっかくの附属学校なので、できること・したいことは実現できるように積極的に互いを利用した方がいいと考えるから。
- ・芸術のなかでも身体全体で良さや迫力を感じて発表として出きることは音楽だけであると思うから。
- ・誰かに披露する機会があった方がやる気が出るし、完成度が上がれば音楽はもっと楽しくなると思うから。
- ・大学生の演奏と高校生の合唱という伝統的なものになり、かつ交流のきっかけにもなりうると考えられるから。
- ・今までの自分たちの成果を発揮できる場だし、発表会があることでそれを目標にして練習を頑張れるからです。また、ほかのクラスや学年の発表を聞くことがすごく楽しかったです。
- ・大学でどのようなことをやっているのか興味深かった。
- ・音楽という個性がそのまま音色に伝わるようなもので、他の学年や大学生達の演奏を肌で感じることで自分の中の音楽になにか良い影響がそれぞれ生まれたと思うから。
- ・同じ学年の同じ世代や同じ学校だけでなく色々な世代の人々と交流する機会をもっと増やしていくべきだと思うから。
- ・高校だけでなく広い世界を聞くことができるから。
- ・1年生は一年後の自分たちを想像してモチベーションとなると思うし、2年生は一年前の自分を振り返る機会になり、自分たちの演奏が始まる前にこれが最後の発表になるのだと意識づけることができたから。
- ・普段聴くことのない音楽や楽器の音を聴くことができる良い機会だと思うから。年齢がそこまで離れていないので、より身近に感じやすくなる効果があると思う。
- ・大学生の人の演奏を聴いたり学年を超えて音楽的に交流できるから。
- ・音響設備がもっと良ければなあと思う。
- ・どちらにも利点があり、大学と合わせるからクオリティ上げないといけないという良いプレッシャー(?)がかかって練習するから。
- ・他のグループや学年の発表を聴くことで、刺激を受けてよりいい発表ができるようになると思うから。
- ・様々なジャンルの音楽を聞くことができるから。

#### 4. 大阪教育大学と連携した取り組み ～2022年度総合プルーフ古川講座（12名）を中心とした取り組み～ 上述した合同演奏会以外で、今年度音楽を通して大学と連携して実現した取り組みについて報告する。

##### 4-1 取り組みの概要

総合プルーフとは、グループで課題研究に取り組む力と、プレゼンテーション能力を養うことを目的とした高校2年生を対象とした科目であり、今年度は10名の教員がそれぞれテーマを設定し、受講希望調査を行った上で、6月から活動を開始した。以下、受講希望調査時の案内文である。本校で音楽を探究する講座を開講するのは珍しく、筆者は今年度本校で初めてこの授業を受け持つこととなった。反省点も多くあるが、日頃の教科の一斉授業ではできないアカデミックな内容を扱い、演奏会につなげることができた。そのことについて報告する。

古川講座 『世界のクリスマス・キャロルを巡る』（南館4階音楽室）

皆さんは、クリスマスソングと言えれば何を思い浮かべますか？また、思い浮かんだ曲がいつ頃どこで生まれたのかご存じでしょうか？上半期では、ヨーロッパ各国のクリスマス・キャロルを実際に原語で歌い、音楽的・言語的・文化的特徴から楽曲のよさや魅力を探ります。下半期では、クリスマスにまつわる合唱作品を取り上げ、作品へのアプローチの方法や演奏表現技術について学ぶとともに、集大成として皆さんが興味のあるクリスマスの歌をチームで選び、音楽作品研究と演奏を求めます。それらは相当な労力を要することとなりますが、研究したことを踏まえて演奏すると、これまでとは違った世界が見えてくるでしょう。

この講座では、演奏発表として12月26日（月）に大阪市中央公会堂中集会室でのクリスマスコンサートを設定した。折角の機会なので音楽選択生にも声をかけ、有志として参加してもらおうこととした。この企画の目的はいくつかあったが、特に筆者としては、非日常空間でかつ響きの豊かな会場で演奏することでしか得られない“感覚”があることを生徒に知ってもらいたいということが大きかった。この“感覚”は音楽を探究する者にしか分からないものであるが、その感覚に取り憑かれた人々が、生涯音楽と密接に関わり過ごしているように思う。本校生徒は音楽的ポテンシャルが極めて高く、その“感覚”を体験する機会を設けることにより、学習指導要領にある「生涯にわたり音楽を愛好する心情を育む」ことをより深いレベルで実践できるのではないかと考えた。その過程において、合唱指揮・フランス文学・チェロを研究している3名の大学の先生にご協力いただいた。プロフェッショナルな学びの体験を通して、大学での学び方について先行して知るこののできる機会となった。

##### ① 合唱指揮者 太田 務 先生（大学授業「合唱」担当講師）との連携 2022年6月9日（木）

日頃音楽を専門に学ぶ学生に対して合唱を指導されている先生からの直接指導は生徒たちにとって刺激的な時間となった。イギリスのキャロルを3曲取り上げ、当時の様式感や歌い方を実践的に学ぶことができた。

[レパートリー]

Lullay, lullay : Als I lay on Yoolis Night [クリスマスの夜に横たわっているとき]

Hayl, Mary, ful of grace [ようこそ、マリアよ、恩寵に満ちたお方よ]

Ding! Dong! Merrily on high [ディン！ドン！ 愉快地に空高く]

##### ② 井上 直子 教授（グローバル教育部門）との連携 2022年9月8日・22日（木）

フランスのキャロルとして有名な Les Anges dans nos Campagnes [荒野の果てに] を取り上げた。フランスのクリスマスについて実体験をもとに講義いただいた後、フランス語の発音のポイントを確認し、実際に発音の練習を行った。鼻母音など慣れない発音に苦戦しながらも、井上先生の軽妙なトークにのせられ、フランスの世界観にどっぷりと引き込まれ、気がつけば発音も自然に上達していた。旋律の流れとフランス語の発音との関わりにも言及しながらのアカデミックな2日間を通して、大学での学びを疑似体験でき、大学進学後に第二外国語で何を履修するのかを考えるきっかけにもなったのではないかと。



### ③ 大木 愛一 名誉教授（チェロ）との連携 定期的実施

チェロの演奏を通して、音楽の奥深さをいつも生徒たちに示して下さっている。昨年度より弦楽器を学んでいる生徒数名と一緒に特別弦楽アンサンブルを結成し、授業の場で演奏を披露することで音楽を選択している生徒全員に還元している。弦楽器を学ぶ生徒にとってはプロのチェリストから実技指導を受けるだけでなく一緒に演奏する経験ができる上、他の生徒たちは本格的なクラシックの演奏を生で聴くことができる何とも贅沢な時間である。今回のクリスマスコンサートでも演奏を引き受けてくださり、弦楽アンサンブル伴奏で音楽選択生有志がバッハとヘンデルの作品を合唱した。

#### 4-2 クリスマスコンサートアンケートより

生徒と来場者のアンケート自由記述の内容をいくつか紹介する。コンサートに至るまでの生徒たちの取り組み、演奏する空間、そして観客、全てがそろった環境での演奏となり、非常に高い満足感を得ることができたことが読み取れる。音楽科の学習では、「音楽を形作っている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること」が表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力として、新学習指導要領に整理されている。世界各国のクリスマスキャロルを演奏するための練習過程において音楽を形作っている要素についてある程度知覚してきたが、会場の豊かな響きを経験することにより、深いレベルでの感受が引き出せた。アンケートにおいても、「残響」「余韻」「ハーモニー」等響きに対しての記述が多く見られた。また、コンサート終了後の家庭での会話からも知覚・感受が行われる。音楽科の学習は、学校だけで行われるものでなく日々の生活に息づいていることを改めて認識するとともに、このような体験をできるだけ多くの生徒にさせてあげられるような取り組みについて考えていきたい。音楽科の学習をすすめていくは、生徒たちに知覚・感受を促すための“きっかけ”を与えることが重要であると今回の実践を通して感じた。

#### 出演生徒（自由記述）

- ・歴史ある風貌の、西洋風な建物だったので、今回の「クリスマスキャロル」の雰囲気と似通っていると思い、より表現に繋がりやすかったと思う。
- ・音がよく響いたので和音がとても美しく聞こえた。歌った時には特に最後の音の残響が美しいと感じたので、いつも以上に余韻を味わうことができた。ただ、歌っているときには遠くの人の声は聞こえにくかったので、息を合わせるのが難しかった。
- ・雰囲気があり、広々としていて歌うのが心地よいと感じた。音の響きやハーモニーをより強く感じる事ができたので、今回のコンサートに最適な場所だと思った。
- ・弦楽器の響きがすごく良くて感動しました。また、会場が広く、内装も綺麗でテンションが上がりました。声の響きも良くて、発声練習のときから楽しかったです。
- ・少人数でもそれなりに様になるくらい響いていたというのと、歌っていて気持ちよかったから。

#### 来場者（自由記述）

- ・コロナ禍では、音楽芸術を含むエンターテインメントは、不要不急とされ、不遇な境遇に置かれてしまいました。でも、音楽こそ、前を向いて生きる為に必要なのではないかと、確信できた気がしました。観客を目の前に堂々と歌い演奏する生徒さんたちに、計り知れない希望と、可能性しかない未来を感じました。まさに心の琴線に触れる声と音だったと思います。こんな機会を与えてくださった先生にも心から感謝しています。本当に素晴らしい時間をありがとうございました。こういう場所で演奏する機会をぜひ増やしてほしいと願います。
- ・会場、プログラム、出演者の皆さんのレベルの高さ。すべてかひとつにマッチして、クリスマスに相応しい演奏会でした。

## 5. 実践のまとめと今後の展望

アンケート結果を踏まえ、本実践を通じた高校生・大学生双方のメリットをまとめるとともに、連携する上での課題を述べる。

### 高校生にとってのメリット

- ・音楽を専門に学んでいる学生による本格的な演奏を聴くことができる
- ・大学生と年齢が近いので、あまり気を構えずにコミュニケーションをとることができる
- ・大学と協働することで、高校の授業だけでは体験できないスケールの大きい演奏を間近に体験できる
- ・大学生や大学教授からの直接指導を受けるなどの機会を通してアカデミックな学びを体験できる
- ・家庭でのコミュニケーションを深めるきっかけとなる

### 大学生にとってのメリット

- ・現場と交渉して演奏会を創り上げる一連の過程を通して協働力やコミュニケーション力を身につけることができる
- ・教育実習以外で現場と関わるができる
- ・実際の教育現場において教師が指導するありのままの姿を見ることができる
- ・音楽を教えたり披露したりする経験を通して、自らの音楽的な課題を客観的に見つめ直すことができる

### 連携する上での課題

- ・大学の授業体制について

今回は大学授業『社会芸術教育協働活動・音楽』との授業連携を行ったが、学生に対し授業の趣旨が正確に共有されておらず、シラバスに記載している到達目標や授業の概要を多くの学生が理解しきれていない現状があり、ただ単に「受け入れ先で演奏会をする授業」だという認識である。そのため、受け入れ側の本校から大学授業の到達目標を伝えるところからスタートすることとなった。また、大学指導教員と学生のコミュニケーション不足も課題としてあげられる。受け入れ側の学校現場は多種多様な仕事を抱えており、その中で連携していくためには「報告・連絡・相談」が必要不可欠である。そのためにまずは大学の中でコミュニケーションが円滑に行われるよう努力する必要があると考える。また次年度に向けて授業のタイトルにもある社会芸術教育協働活動とはそもそもどのようなものなのかについて、大学指導教員と学生を受け入れる現場と議論する機会を持ち、学生に身につけてほしい資質・能力と、受け入れ現場の生徒や観客が得られるものについて整理することで、この大学授業がより生きたものになっていくのではないかと考える。今後も大学と話をしながら、取り組みをすすめていきたい。

- ・会場や費用の問題

演奏会を企画するにあたって、2つのことを大切にしたいと考える。

- ① 良い響きの場所で演奏することで得られる芸術的“感覚”を体験する。
- ② 多くの観客に演奏を聴いてもらう。

2021年度の第一回合同演奏会では、①を重視した連携プログラムとなった。ホールで開催することで得られるもの大きかったが、出演生徒と大学生のみでの演奏会となり、出演者以外の観客を入れることができなかつたのが課題として残った。2022年度の第二回合同演奏会では、②を優先することとし、大学と連携して大きなホールで開催し多くの観客に演奏を見てもらうことができないかと模索したが、大学教授とスピード感を持って連携していくには課題があまりにも大きく、本校体育館メインアリーナで演奏会を実施した。コロナ禍で様々な制限がかかる中、学校行事に対する制限により参加したくても参加できない保護者に今回案内することができ、生徒たちの演奏を聴いていただけたことは意義深い。冷暖房がなく極寒の中での演奏会となり、音楽に集中できる環境ではなかった。その2つのバランスが難しいが、音楽を担当する教員としては、①②両方を大切にしたい演奏会を実施できるように努力する必要がある、それを実現するためには連携が鍵になってくる。(4で述べた大阪中央公会堂でのクリスマスコンサートでは、少人数での取り

組みではあったが、①②両方の要素を含んだものとなった。）高校単独ではできないことが、大学との連携によりできるようになることが増えていく。芸術はお金がかかるが、だからといって緊縮の方向に行くと芸術文化全体が衰退の一途をたどることとなる。今回のような取り組みを積極的に発信し、教育現場が芸術的活動を行う公共施設をもっと借りやすくなるシステムとなることを期待する。

また、連携していく上で必要となるのは練習場所である。先ほど述べたように公共の施設を借りやすい環境を整えるのも一つであるが、大阪教育大学が日本有数の教育大学の一つとして地域の多くの学校とつながっていく上で、音を勉強することのできる施設かつ式典等行事でも使えるある程度の広さのある施設を学内に備えておくべきではないだろうか。「音楽を通した連携」というテーマについて長期的な視点で考えた際に、音楽を奏でる場所について忘れてはならないことを強調しておきたい。

## 6. おわりに

新型コロナウイルスが猛威を振るうようになって3年が経とうとしている。音楽はその影響を大きく受け、音楽教育の中核であった歌唱やリコーダー等の表現活動に制限がかかるという前代未聞の事態に陥り、現場の音楽科の先生方は困惑したに違いない。また大学で音楽を専門に学ぶ学生にとっても、未だに厳しいルールでの学生生活となっており、満足な音楽活動ができていないとは到底言えない。このような時代だからこそ、できないことばかりに目を向けるのではなく、できることを生徒と一緒に探っていくことが大切であると考え。まずは、音楽科教員である筆者自身が楽しく音楽に向き合い、やりたいと思ったことを多くの人の知恵をお借りしながら実現させようとする姿勢を生徒たちに見せることで、「前にすすんでいくこと」や「協働すること」の大切さを伝えていきたい。その輪を広げていくことが、日本の芸術文化の発展につながっていくと信じている。また、音楽を専門に学ぶ大学生の多くは音楽の教員免許を取得する。未来の音楽科教員を育てていくという観点からも本実践は意味のあるものであると考えられる。今後、本実践のような音楽を通した高大連携の取り組みが定着し、担当教員が変わったとしても持続可能なものとなるよう、課題をていねいに分析した上で、大学教員と一緒にブラッシュアップしていきたい。

## 謝辞

この2年間大阪教育大学教育協働学科芸術表現専攻音楽表現コースの山畑誠准教授をはじめ、学生と一緒に取り組みをすすめることができました。厚く御礼申し上げます。

## 研究助成

この研究は、次の研究助成を受けました。

2022年度財団法人青松会中学高校新教育研究助成

## 註

- ・文部科学省「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（中教審第228号）  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985\\_00002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm)
- ・高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 芸術編音楽編 文部科学省（平成30年）
- ・大阪教育大学ホームページより 教育協働学科について  
[https://osaka-kyoiku.ac.jp/academic/education/edu\\_collabo/](https://osaka-kyoiku.ac.jp/academic/education/edu_collabo/)



# Development and Implementation of High School and University Cooperation Program Through Music

— Explore Collaborative Perspective —

FURUKAWA Yusuke

**Abstract:** In an era of rapid change, the ability to collaborate with diverse people is required. In this research, high school students and university students cooperate to create music concerts. We will examine what kind of changes in consciousness there have been on both sides through that concert. This paper describes a two-year practice report that explores perspectives for collaborating with universities, and describes the significance of collaboration between high schools and universities.

**Key Words:** Music, Performance, Cooperation, Collaboration, Expression